鳥取農政懇話会報

NO.55

2008年11月

山村を支えるわさび田（倉吉市関金町小泉）

巻頭言

大変革時代と「昭和スタンダード」

会員　寺谷　寛

今年ももう半分が過ぎた。月日が経つのは早いもので、十年ひと昔というが、三年ひと昔ぐらいの速さに感じる。われわれは、それだけ変化の激しい時代に生きているのだろうか。

日本は今、第三の大変革期にあると言われる。明治維新、終戦に次ぐ変革である。過去二度は見事に乗り切り、その後の繁栄を立派に築いてきた。今回は１９８９年のバブルと冷戦構造の崩壊がきっかけだが、その後二十一世紀に入り、二十年近くが経つが改革はまだ道半ば、依然として新たな体制やシステムが確立されていない。

これまで二度の変革は日本が手本とするモデルがあった。明治維新はヨーロッパの列強、戦後はアメリカであり、「追いつけ、追い越せ」だった。そのうえ、明治維新は開国、戦後は敗戦という外からの力があり、変わらざるを得なかった。元々、われわれは物真似をするのは得意だが、自ら変える、変わるのは苦手な国民性である。

グローバル化、国際化が進む今日、日本が手本とするものがないし、外からの大きな力も見えにくい。過去二度は十年ほどで旧体制から新体制へ移行したが、今回思うように進まないのはそのような理由だろう。

こうした変革の時代をわれわれは何を目標に、どのように考えていけばいいのだろうか。今、昭和ブームといわれるが、私はいわゆる「昭和スタンダード」、昭和三、四十年代を一つの規範として現状を振り返り、これからの時代を考えるべきではないかと思う。

昭和をひと言で言えば復興から高度成長へとわが国の繁栄を築いてきた。中で

も三、四十年代は戦後の大きな転換期であり、その大きな節目となったのが昭和三十九年の東京オリンピックである。それを境にわれわれの暮らし向きは様変わりした。周りにはモノがあふれ、生活が便利になり、経済も世の中もドラスティックに変わった。

時あたかも高度成長真っ只中。「モウレツ社員」「企業戦士」がもてはやされたのもこの時代である。

あれから四十年余り。確かに見違えるほど「豊か」になった。だが、その原動力になった団塊世代が定年を迎えるようになり、ふと振り返ってみるとき、われわれが求めていた「本当の豊かさ」とは何であったか。豊かさの一方で失ったもの、忘れてしまったものはなかったか。そのことに気づき始めている。

昭和が見直されるのは、「あの時代は良かった」という単なる郷愁だけだろうか。現代社会が抱えるさまざまな矛盾や閉そく感の裏返しではないか。われわれはいつの間にか「モノ」や「カネ」に価値観の尺度を求めすぎ、かけがえのない自然環境やわが国固有の歴史や文化、伝統などをないがしろにしてきた。社会の隅々で起こっている子どもや家族をめぐる問題、さまざまな社会の病理も決して無縁でない。

農業もそうである。戦後の農政は近代化をめざし、選択的拡大や規模拡大を進めてきたが、現状は農地の荒廃や担い手不足が深刻化し、農山村は人口減や過疎化にあえいでいる。有機・減農薬栽培やエコ農業が見直され、地産地消などの運動が広がるのもその反省の表れである。

日本は四季の変化に富み、自然にも恵まれている。本来、みずほの国のはずだが、食料自給率は３９％まで落ち込み、先進国としては考えられない状況にある。今日、世界的に食の安全が脅かされたり、食料不安が広がっている。今こそもう一度足元を見直し、自給率向上の論議を巻き起こすチャンスである。日本農業再生の道はそれしかない。

（新日本海新聞社西部本社代表）

小島志講座

水田は素晴らしいシステムだ

『水はいのち』著者　小島　慶三
第７章「三つの対話－酒井邦恭氏と―」より

酒井さんとの対話は、シューマッハ―の「スモール・イズ・ビューティフル」（小島・酒井訳）の日本版実践者「分社」システムの創始者との対話である。

酒井邦恭（さかい・くにやす）氏

分社経営方式の創始者、太陽工業株式会社社主
昭和３年、東京都に生まれる。早稲田大学中退。「分社経営こそ人を生かし会社を生かす」との信念で、グループ３０社（平成８年現在）社長への完全な権限委譲を経営の基本とする。昭和５３年、社長辞任後は、太陽工業株式会社社主として相談役に徹する。小島塾顧問。
著書『分社―ある経営感覚』（朝日新聞社）ほか

小島　ご存知のように日本は国土の３分の２が山林に囲まれている。このことで「日本は山国で平地が少ないから農耕に適さない」ともいわれますが、山や緑が豊富ということはなんらデメリットにつながらないと思うんです。むしろ、これだけ緑が豊かだからこそ、日本の国土は高い生産性を誇るに至ったと考えるべきです。

さらに、日本の降水量は年間約１,８１５ミリで水資源は豊富。森林は一定期間、その中に貯水してくれるわけですから。いわば天然のダムですね。１回森林に貯水された水というのは、その間に肥沃な落ち葉などの養分が混入し、農業に適し

た水が育つわけです。また、森林地帯が多いということは、雨による土壌の流出が少ない。他国と違って森林があることで土壌の団粒構造が保たれるわけです。すなわち、日本の資源は満ち溢れているんです。

酒井　では、大規模経営に変えろとか、むやみやたらに農業は輸入に頼ればいいなんて発想はナンセンスなんですね。

小島　全くその通りですよ。

酒井　農業だけでなく、日本の工業の発展も、石油があったからではなく、豊富な水があったからこそ、だと思うんですが。

小島　それもいえてますね。大して広くない国土の上で、これだけ高密度の工業生産ができたのは、まさに豊かな水のおかげです。先祖の遺産として受け継がれてる水田、これも日本の水資源の賜物で、ほんとに素晴らしいシステムだと思います。まず、水の作用によって塩の集積がないし、連作も効く。なにしろ同じ水田で、同じ米を１０００年以上も連続して作っているんですから。

酒井　ふーむ。そのうえ、よく手入れされた日本の水田では、単位面積あたり世界最高のカロリー生産性をあげていると聞きますし、旨さでも日本の米が一番だしね。この日本の農業の賢いシステム、このまま維持する方法は？大規模化はむりだし。

小島　やはり土のメンテナンスができる家族単位の農業でしょう。実をいうとアメリカやヨーロッパでも日本の農業を叩いてますけど、ことシステムに限っては見習おうという動きがあるんですよ。特にアメリカは、家族単位の農業は建国の時の社会のあり方だったんです。つまり建国の精神に戻ろうと、そういうわけです。９０年代の新農業法の中でも、やっぱり家族単位の農業の保護、建国の理念でもある草の根デモクラシーといったものを家族単位の農業に見出そうとしているわけです。

酒井　表向きの外交の面だけを見てると、そうは思えないんだけどねぇ。

小島　世界的な環境破壊の問題に目をつぶれなくなってきていることが、一ついえるんでしょうけども。だから、アメリカ的な農業を推進する評論家のいっていることは、とんでもないこと。地球にいいことなんてまるでないんだからね。そういう連中のいっているのは亡国の思想だと思いますけどね。スモール・イズ・ビューティフルはそのまま農業にも置き換えられるんです。

酒井　確かに。ただ、どうなんでしょう。スモール・イズ・ビューティフルをそのまま農業で実践するとなると、ただでさえ、農村では高齢化が進んでいますから。今までの農業のイメージでは。

小島　そこなんですね。例えば、これからバイオが発達するでしょ、情報システムも発達するでしょ。バイオと情報系の技術っていうのはまさに来世紀の技術ですよ。これを一番使えるのは、農業を始めとする生命系の産業なんです。ですから、家族単位であっても情報のネットワークを作ればいいわけで、そうすれば、何時、何処で、どの作物を作る、あるいは刈り取ったらいいか、そして出荷先はといった具合に、全てコンピューターでコントロールできるようになる。土、さらに地の成分までね。

酒井　なるほど、農業という一つの枠ではなく、工業、あるいはバイオテクノロジーとの連動ですね。

小島　えゝ、農業にはまだやっていないことが沢山ありますね。耕作用ロボットだって今までのものじゃなく、センサーを沢山備えた小回りの効く優秀なものを開発すれば、年寄りもバイオとコンピューターでやれるということになったら若い連中も面白いから帰ってきますよ。農業には果てしない可能性がいっぱいあるんですよ。

酒井　そうですね。生命系コンプレックスの中でいろんな原理をミックスしてゆけば、農業は先端産業になり得ますし、何よりも地球を救うことができますね。

小島　農産物を輸出するより、日本の農業のすぐれたシステムを輸出することが世界に対する最大の貢献になるのではないでしょうか。

『水はいのち』（めいけい出版、平成８年１０月初版発行）より抜粋

主　張

中国旅行で考えたこと

“農政の原点は耕作放棄地ゼロ作戦で!!”

会員　米田　義人

温和な語り口で、生命産業である農業のあるべき姿について、世界の歴史を検証しながら、理路整然と説いておられた故小島慶三先生の温顔を想いうかべております。

敬愛する先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

私は昨年８月鳥取県中部日中友好協会の「第 13 次友好交流訪中団派遣事業」に家内共々初参加させていただき、貴重な体験を得る事ができ、大満足の 8 泊 9 日の旅でありました。

ゴビ砂漠の雄大なシルクロードを堪能しながら、敦煙から天水に至る河西回廊の歴史に触れ、バス走破 2,000km の旅で、莫高盾、嘉略関長城、馬蹄寺石窟、麦横山石窟、等貴重な文化歴史遺産に接し、中国文化歴史の重みを肌で感じ興奮を覚える毎日でありました。

中国では、いまスケールの大きな未開発の文化遺産を観光立国を目指して、大々的に整備しており、今後文化観光面でも大きく前進が図られることでしょう。

今回の視察旅行で、一番印象に残った収穫は、蘭州から天水に至る高速道路が、山崩れのため通行不能となり、迂回路を利旦(8 時間を要した)したことにより、貴重な体験をさせていただきました。迂回路は急峻な山腹を縫うように走っており、広大な山腹を小さな段々畑(谷地畑と言うべきか)が、荒廃農地は皆無で、小さな作道を利用して立派に管理耕作され、山頂まできれいに管理されている農地に目をみはってしまいました。

中国の農耕地は広大な平坦地に、拡がっているものと思っていた私にはまさに青天の辞産でありました。

また、集落も各戸が土塀で囲まれ、粗末なレンガ造りの民家であり、この黄土高原の農家の生活環境の厳しさは、相当のものであろうと思った次第であります。

一方この様な生活環境のなか、農産物を売っている女性、農産物の収穫、農作業に精を出している男性、生き生きとした瞳を輝かせた子供たちなど、その表情は明るく、心豊かな生活を想像することができました。

翻って、わが国の現実を考えたとき、食料自給率40%を切るなかで、37万haと言われる耕作放棄地は年々増加の一途をたどり、飢餓人口が世界で9億人といわれる食糧事情の中で、400 万トンともいわれる家庭で廃棄される食料に無関心な、日本の社会環境等を考えたとき、この劣悪な生活環境の中で荒廃農地皆無の圃場管理を目にし、複雑な気持ちを旅行中拭い去ることができませんでした。

この中国農業のすばらしい一面を見せ付けられて、私は日本農業の基本方針として、耕作放棄地ゼロ政策を農政の柱とすることにより、わが国の農政課題である農業後継者対策、自給率向上対策、地産地消（身土不二）の実践、中山間地対策、農産物価格対策、消費者対策、食農教育、自然環境対策、農用地転用対策、農業施設維持管理対策、等々の課題解決がなされてはじめて耕作放棄地皆無のすばらしい日本農業が確立できるのではと強く考えた次第です。

あの広大な国土を持つ中国の農地管理の状況を見、世界の食料事情を考えた時、日本農業も否応なく不耕作地解消は勿論、農地拡大が必要な時代が遠からず到来するのではと思えてなりませんでした。

また、中国の旅の最終日、上海の水上夜景も圧巻でありました。

巨大な宣伝ネオンサインの多くが、日本企業の物であり、世界のグローバル経済に得心し、日中両国も強い粋で結ばれ仲良く相互発展を願う心境になったのは、私一人ではなかったと思います。

中国旅行の所感の一端を述べ報告とします。

終わりに、この紙面をお借りし、先般恥ずかしながらの私の叙勲受賞に際し、会員の皆様からお祝いしていただき感謝いっぱいでございます。御礼を申し上げます。

有難うございました。

（前琴浦町長）

主　張

智頭町新田のむらづくり

―「新田カルチャー講座」１００回を迎えて―

会員　　上田　弘美

鳥取県智頭町新田集落は、鳥取県東部の岡山県境の中山間地にあり、標高は４４０m以上である。人口は昭和３０年には２２戸で１０７人いたが、過疎化の進行により現在はわずか１７戸で５０人となり、高齢化率は３０％を越えている。農地は８ｈａしかなく、１戸平均が４０ａあまりで専業農家ではやってゆけず主たる産業もない。このままでは集落が消滅してしまうとの危機感があった。この疲弊した新田集落を活性化し、新しいむらづくりのために集落の住民自らが取り組んだ軌跡について考察してみることとする。

NPO法人「新田むらづくり運営委員会」の設立

新田集落では、平成６～１０年に第一次総合計画を樹立し、都市との交流事業のためのハード面を整備した。主な施設としては、宿泊研修施設として「新田人形浄瑠璃の館」が各種研修や交流の中心をなしており、さらに喫茶「清流の里新田」やロッジ「トンボの見える家」、「体験農業田」等がある。

平成１１～１５年度に第二次総合計画を樹立し、２１世紀を“こころの時代”と位置づけ、文化を重点としながら各施設の効率的運営をするソフト事業について検討した。その後５年ごとに総合計画の見直しを実施している。

新田集落では活性化の中心となる組織を設立する機運が高まり、平成１２年１２月１２日にＮＰＯ「新田むらづくり運営委員会」が設立された。集落型のＮＰＯ法人は全国唯一である。したがって会員は集落全戸加盟の１７名である。当初は岡田一会長であったが、早瀬勲会長に引き継がれ、現在は岡田和彦会長となっている。行政をあまりあてにせずに、自分たちのことは自分たちで意識改革をやって行こうと、小さな集落の住民全員が行動しており、すばらしい実績をあげて

いることに意義がある。

これらの活動が評価され、平成１５年には「豊かなむらづくり表彰事業」で農水大臣賞を受賞し、平成１８年には「オーライ！ニッポン大賞」で審査委員会長賞を受賞している。主な活動について紹介することとする。

都市住民との交流

交流事業の柱の一つに「田んぼの学校」があげられる。大阪いずみ生協の親子と、地元の智頭町山郷小学校の親子が一緒になり、水稲やサツマイモの栽培や収穫を行ったり、田んぼでドッジボールや綱引き大会を実施したり、川中の水中生物を観察したり、さらに星空の観察、棚田保全運動等を実施している。これらの都市住民との交流により、都市住民は都会の物質的な豊かさと引き替えに、自然の豊かさを体験でき、また新田住民の意識も変わってきた。

人形浄瑠璃芝居の上演･伝承

新田集落では、幕末から明治初期に若者の間で博打が流行したので、健全な娯楽を進めるために、明治初年に青年・岡田太平治たちにより人形浄瑠璃芝居が始められた。その使い手が三位一体となり、日本人の心の底に流れる義理人情の世界を生き生きと演ずるもので、現在まで脈々と継承されている。

昭和１０年には地元新聞社主催の演芸大会で優勝し鳥取県一の栄誉に輝いた。昭和２６年の大阪文楽座の鳥取公演のおり、人間国宝・桐竹紋次郎師の知るところとなり、昭和２７年、２８年の２回にわたる来村により演技指導を受けた。

最近では全国人形芝居サッミットや各種イベント、伝統芸能祭等に参加している。人形、写真、資料は、「清流の里新田」に常設展示されており、予約があれば人形浄瑠璃芝居を鑑賞することが可能である。

新田カルチャー講座の開催

山村に住んでいても、全世界に向けての視野拡大と教養向上を目的に、平成１２年６月から現在まで毎月１回講演会を実施してきた。講師は各分野の著名な講師を招へいしている。

平成２０年８月１０日が１００回目の記念講演会となった。講師は国民新党代

表代行の亀井静香衆議院議員であり、「続・地方をおろそかにして国の繁栄はない」との演題であった。講演の要旨は次のとおりであった。

最近の政界では二世議員が多いが、農村の生活が分からない。昨年の参院選では新しい政治を創る流れがあり、とくに中国地方では野党が進出した。小泉政権下では、大企業が利益をむさぼる新自由主義を謳歌する一方では、庶民の生活が疲弊し、下請け企業やバイト・パートが増加した。以前の日本はマンパワーがあり、消費ものびた時代であった。今後は地方にも金を出し、地域に応じた発展を期す必要がある。飼料はアメリカから大量輸入しているが、転作田で飼料米を栽培すべきである。これからの選挙は政策中心のマニフェストが重要である。やがて衆議院の解散もあろう。農家は水と緑の番人である。農家の怒りをぶつけよう。兼業農家にも配慮する政治が必要である。新田集落も元気を出して下さいと結ばれた。

なお、私は平成１６年２月１５日に第４６回の「新田カルチャー講座」に講師として招へいされ、「どうする、日本の農業政策」と題して講演する栄に浴した。食料自給率が長期にわたり４０％に停滞するなかで、日本の食料はこれで良いのかと憂慮される。今後さらに外国からの輸入攻勢が増大し、日本の農地は荒廃し、農の心が失われようとしている。農業を軽視したり、田畑の荒れた国に発展はない。不耕作地をなくし、農地の土壌を肥沃にし、生産力を維持発展させることが国の責務であることを強調した。

（元鳥取県農業試験場長）

主　張

食育コラム：シリーズ〔２〕

会員　川上　一郎

●　体験で感性磨く

食育には、さまざまな「学び場」があります。“植物・動物・微生物の食べる・食べられる関係”は、その原点ともいえます。すべての動物のエネルギーは、元をたどれば植物の光合成に依存し、動物の死体は微生物に分解され、植物に利用されます。「食物連鎖」は地産地消の理念でもあり、食育にも意義深いものです。

しかし、「学び方」となると、最良の方法というものはありません。自然と向き合って学び取るしかないのです。自然の偉大さを目の当たりにして、人間がはるかに及ばない「何か」を感じた時、また、動植物を見て触って、そのたくましさと不思議さを実感した時、人は感動を覚えるのです。五感自体が必要な刺激をつかみとって自発的に感性を磨くのです。

したがって、子どもたちの感性を磨くには、人間本来の生活に直結した、幅広い視点からの真剣な体験が必要です。電気もガスも使わない「かまど炊きごはん」や機械を用いない「原始的農法」などがよいとされる理由でもあります。昔、貧しかった時代は、誰もが何とかして生きていこうと真剣でした。

生活の便利さやぜいたくさによる「食を選ぶ力・作る力の欠落」や「子どもの理科離れ」が叫ばれる今日。感性を磨く原体験として、そんな視点を生かしたいものです。

●　野菜嫌いをなくす食法

野菜嫌いは、子どもたちの心身を乱す重要な問題です。何とかしなければいけないと誰しも思うのですが、ヒトとしての食嗜好もあってうまくいきません。悪

戦苦闘の果ては根負けし、子どもの好き嫌いを容認してはいないでしょうか。

ある実態調査の研究によると、『好き・嫌い』と『食べる・食べない』は別ものであり、「野菜嫌いは感覚によるもので、食べないのは悪習慣によるもの」と追究しています。

野菜嫌いは、野菜（植物）の防衛物質である「苦味（毒物の味)」と「酸味（腐ったものの味)」の情報を人間側がとらえた時、経験する心的現象です。酸味や苦味が入っていない母乳の味から脱け出していない子どもは、なおさら敏感なのです。

研究は、「脳内に備わっている『嫌い』の感覚回路を『好き』の方へ変える繰り返しの訓練しかない。つまりは、慣れるしかない」と説いています。

自然の木の実を食べたり、わき水を飲んだことが一度もない子どもが六割もいるといわれる今日、食材の持ち味をはっきりとらえる体験が重要になっています。ダイコンの首と尻の食べ比べ体験も好奇心や集中力を高める味覚教育です。ちょうど大人の利き酒や試食会のようで楽しく、効果的な方法です。しかしながら、何よりの食べ比べは、古くから伝わる和食の三角食べ（交互食べ）の食法にあることを忘れてはまりません。

（県農業会議会長、食育教育アドバイザー、前農協中央会専務理事）

主　張

これからが食べ頃　鳥取二十世紀梨

会員　井上　耕介

植物は言葉を持たないが、四季折々に表情を変えて語りかけてくる。梨、リンゴ、桃などは、春には果樹園を白やピンクの花で埋め尽くす。やがて実を結び、夏から秋には熟れ色となり、「美味しい」果実を提供してくれる。

このような生物の営みは、子孫繁栄が原点だ。花が美しい花びらを広げ、甘い蜜まで蓄えて咲き誇るのは、虫たちを呼び寄せるためである。虫たちに花から花へと花粉を運ばせて、種子を作る。

実を結んだ幼い果実は、種子を核として果肉を肥大させる。種子が未熟なときは青く、硬く、酸っぱく、苦味さえあり、食べられるものではない。果実の色も葉の色と区別がつかず、見えにくい。種子が成熟して黒褐色となってくると、果実は赤や黄色に色を変え、芳香を放ち、食べてくださいとアピールを始める。

鳥や動物が果実の色香に誘われてこれを食べ、種子は他の場所に運ばれて、芽を出し成長を遂げる。こうして子孫を残すことに成功するとともに勢力範囲を広げていく。果樹と動物の関係はまさに共生である。

果実の色香は、人にも食欲をそそるものである。ところが、梨の二十世紀とブドウのマスカットは、収穫期を迎えると黄色を帯びてくるものの緑色を残したままであるために、未熟なままで販売されることがあり、長年問題を抱えてきた。

まず昭和九年に、京都帝国大学・菊池秋雄教授の指摘がある。市場の二十世紀を見ていると、未熟な傾向がある。原因は、消費者がみずみずしい緑色のものを求め、早く出荷すると価格が高いので、生産者が早採りしている。ブドウのマスカットも同じである（鳥取県の果樹専門誌「果樹王国」）。

また昭和４１年に、鳥取大学・林真二教授の指摘がある。二十世紀がまずくなったという声がある。原因は、生産量が増えて出荷が間に合わず９月１０日頃に味になるものを８月下旬から出荷していることにある（鳥取県の果樹専門誌「因

伯之果樹」)。

鳥取の二十世紀は、昭和５９年をピークに減少を続けているが、出荷量が減っても出荷は８月下旬から始まる。本来の味が乗る９月中旬には価格が下がるからである。

現状打破に立ち上がった組織が二つある。「美味くなってからしか売らん」と梨作りの気概を見せたのが郡家選果場。「美味しくなった梨を高く売る」運動を起こしたのがＪＡ鳥取中央である。

郡家選果場は平成６年、県内で最初に光センサー糖度測定装置つきの選果機を導入し、味保証の出荷を始めた。今年の県の初売りは８月２８日だが、郡家選果場は味を乗せて９月４日である。

ＪＡ鳥取中央は４年前から「完熟二十世紀梨」に取り組んだ。「味が良くなったら価格が下がるのはおかしい。二十世紀本来の味をＰＲし正当な価格で売らねばならない」と坂根組合長の陣頭指揮である。自ら、東京・大阪・京都へ出かけ、市場はもとより直接消費者の方々を招いて試食研修会を続けている。

人工授粉から１５０日かけて完熟させた二十世紀に「美味(びみ)・熟(う)っと梨(り)」とネーミングして、今年は一万ケース（五㌔）の販売を計画している。

赤く色づいた柿の実を食べると、茶褐色の種子が出てくる。二十世紀梨も同じである。播けば芽の出る黒い種子に成ったときを食べ頃とするのが自然であり、これからが食べ頃である。

（ＪＡ全農とっとり嘱託、元県園芸試験場長）

鳥取農政懇話会情報

平成２０年度総会（第１４回）及び学習会

会員　北島　英一

１、　　総会及び学習会日程

１．日　時　　平成２０年　７月　２５日（金）
　　１７：３０～２１：００
２．場　所　　湯梨浜町「水明荘」

３．総　会　　１７：３０～１８：００
（１）平成１９年度事業・決算報告について
（２）平成２０年度事業計画について
（３）役員の改選について
（４）会員の加入について

４．学習会　　１８：００～１８：４５
演題：　「農業を核にした地域づくり」
講師：　　金子弘道氏（鳥取環境大学環境施策学科教授）

５．祝賀会（学習会終了後）　１９：００～２１：００
（１）「西尾邑次顧問（元鳥取県知事）の農政語録」発刊祝賀会
（２）米田義人会員の叙勲のお祝い
（３）北浦勉会長の喜寿のお祝い

本年度の総会は、会場を中部の湯梨浜町「水明荘」で開催し、出席者は２１名でした。

学習会については、山代勁二さん（創造農学研究会代表、東京小島志塾会員）に紹介をいただき、金子弘道鳥取環境大学教授の講演を拝聴することになった。

以上

（鳥取県農業信用基金協会総務部長）